

■■ 浜射場その他 ■■

浜井場

はまいば

浜射場という地名は、花祭りを中心とした村々にも、至る所にあった。ただ、それだけでは、何ら問題とするにも当たらず、この地方の伝承によると、「はまいば」は祭りの水、すなわち行事に使用する禊の水を汲んだ場所だという。もちろん現在では「はまいば」で祭りの「はまみず」を汲む土地はまだ聞いておらず、伝承としてあるのである。演射場の射場が、井場かどうかとすることは問題であるが、一通り言伝えを聞くことも必要であった。そうしてまず、私の手帳にある付近のこの地名を持った土地を挙げてみる。

- | | | |
|---|----------------------|------|
| 一 | 富山村字佐田 ^{さだ} | はまいば |
| 二 | 豊根村字栗世 | はまいば |
| 三 | 山内 | はまいば |
| 四 | 大立 | はまゆば |
| 五 | 下川村字市場〔現、東栄町〕 | はまいば |

以上北設楽郡

- | | | |
|---|---------------------|------|
| 六 | 下伊那郡神原村大字大川内〔現、天竜村〕 | はまいば |
|---|---------------------|------|

以上長野県

まだまだたずねたら沢山あることと思うが、さて以上の土地の地理的状況と、これに伴う伝承を言ってみると、まず第一の富山村佐田の「はまいば」であるが、ここは天竜川の岸にある村で、しかも「はまいば」は岸に沿った一町ほどの地点と、そうしてここにある一軒の屋敷をも呼ぶのである。この屋敷を「はまいば」と呼ぶことについて一つの挿話がある。明治三年、平民に姓を許された当時、この地方の山村も、他の土地の例に漏れず姓を持ったものはごく少なかった。それで村寄合などを開いて姓を定めたが、もちろん平地の人々が悪口を言うように、藤原だの源を、歴史上の知識から得た憧憬などで勝手に決めたとの話は、中にはあるかも知れぬが事実として私はまだ聞いておらず。まるきり縁故のわからなかったものは多くは地名、または、屋敷の地理的状況からつけたのが多かったようだ。道の辻にあるから辻、上手にあるから上手などはむしろ不真面目な部であった。それで今言う「はまいば」の屋敷であるが、これは浜井と名乗った。「はまいば」の「い」に井の字を充てたことは、文字の知識がなかったからと言えればそれまでであるが、考えようによっては、これを当然とする記憶が、何やら心の中にあつたからとも言える。そうして浜井場にある屋敷で同じように浜井の姓を名乗った例は、国境を越えて信濃にもあつて、

第六に挙げたのがそれである。私はまだ大川内の「はまいば」は実際に踏査していないが、話に聞くと、流れに対してやはり前言った佐田と同じような地形とのことである。これもどちらかが真似をしたと疑えばそれまでだが、その疑いはむしろ無駄かもしれぬ。

第二の豊根村粟世あわよの「はまいば」は、小学校前の橋の詰付近を言っていて、これもまた流れの傍である。しかしこれには屋敷を呼ぶことは聞いておらぬ。

第三の同じ村の字山内の「はまいば」は、これまた溪谷の岸に沿った地点で、字牧の島から落ちる川と、一方山から出る俗に言う奥山川との合流点で、ここにも一軒屋敷があり、言伝えではむかし水を汲んだ跡だと言っている。

第四の大立は、これは私が聞いたところでは「はまゆば」と発音している。もちろん多くの人に訊ねたら、ことごとくそうでないかも知れぬ。同所の「はまゆば」は字大立と川下まふくろの間袋との間で、間袋から大立の台へ越す橋の付近であった。

第五の下川村市場の「はまいば」はこれまた屋敷の名として通っている。足込から流れ出る川の、振草川に落ち合う所から二丁ほど上った地点で、川から屋敷まで二町もあろうか、付近は田圃である。

こうしてならべて見ると、「はまいば」を「はまみず」を汲む所とする伝承は、まるきり根拠のないことでもなさそうである。そうしていま一つ注意されることは、その近くに屋敷があって、時にはその屋敷の名となっていたことである。この事実も一通り当たってみる必要がある。ちなみに祭りに使用する禊の水を「はまみず」と称していたことは、すでにたびたび繰り返した事実である。

はまずな（浜砂）

豊根村大字三沢字山内の氏神八大竜王の祭りを初め、同所の花祭りには、以前は他の土地の「はまみず迎え」に該当する行事を「はまずな迎え」といって、これは水でなく砂を迎えてきて、それを釜の水に加えることであった。山内からは霧石峠を越えて、二里余隔てた富山村字河内の天竜川の岸から迎えて来るのである。それで役の者は苔または青笹をもって二個の苞を作り、水際から砂を採ってそれに入れ運んだのであるが、その役は年々定まっていた、村を発ってから帰る道程も、途中で休憩する屋敷も定まっていた。なにぶん二里余を距れているので、朝早く村を発っても途中昼食をする必要がある。それで憩む屋敷は、天竜川の岸にある家に定まっていた。こうした場所と屋敷などは、他の土地で言う「はまいば」と呼んでもよさそうであるが、それはまだ聞いておらぬ。

これと同じような例は、山内から一里程川下にある小谷下の白川神社の祭りの行事である。同所では「はまみず」を迎えるにはやはり「はまみず迎え」と言って、天竜川から迎えたのであるが、これにはその屋敷が定まっています、しかもその屋敷は小谷下からは峠を越して二里余も隔たっている天竜川の岸にあった。その間には山内の霧石峠におけるごとく、分地峠という険道を控えている。

ここの「はまみず」を汲む屋敷は、一にたきあら（滝原）と言って旧家である。天竜川の岸に、洪水の折には床を洗いそうな地点に、大きな屋敷構えでただの一軒家である。そうしてここは以前から小谷下の飛地で、すべて小谷下と付き合いをしていた。近くに分地、大尾等の村があったが、それには関係はなかった。そうして現在この屋敷で、正月の「わかみず」を迎える式であるが、これを一に「はまみず」迎えともいっているから、以前の祭りの「はまみず」迎えの形式を半面に遺しているとも思われるので、一通り言ってみる。

こだま石

この滝原という家の「わかみず」迎えには、朝早く天竜の浜へ下りて、水を桶に迎えると同時に、水際の小石を二つ拾って来る。これを「こだま石」といって、流し元の水甕すなわちこの地方でいう「すいと」の底に沈ませる。この風はまた本村の小谷下を初め、隣地の田鹿、曾川等にもある。家によると、爐の茶釜の中に入れ一年間煮ているもある。ちなみにこの地方の風習では、「すいと」、茶釜等は、これをさかさにして洗うことを固くいむので、翌年の「わかみず」迎えまでは、そのままにあるわけで、一年ごとにこれを取り替えていくのである。

話がだんだん脇へ外れてゆくが、この「こだま石」の名から、思い出されるのは、富山村大谷の熊野神社を訪れた時に、社殿扉の前に、直径三寸ほどの川原石が置いてあった。何のためかと訊いてみたら「こだま石」とのことで、扉の鍵が開かぬ時に、その石で叩いてあけるための用意と言っていたが、これも年々新しく天竜の浜から迎えるとのことである。

湯の島

天竜川岸の「はまみず」迎えの屋敷の話から、ついでに、この天竜の奥地の川岸にある屋敷のことを一通り言ってみる。前言った滝原という屋敷から、五、六町下手に、湯の島という所がある。現今では発電所が設けられたりして、従業員の社宅などもできて賑やかになったが、ここ十数年前まではやはり一軒しかなかった。分地という峪から出た水が天

竜への落口であるが、ここは現在古真立の花祭りに、はまみず迎えをする場所である。古

真立は前記小谷下、田鹿、分地等を合併した大字の名であるが、ここなどももう一步尋ねたら、以前の小谷下の滝原という屋敷における如き関係があったかと思う。それからいま一つ湯の島から天竜に沿って前記滝原という屋敷の軒を通過して、さらに半里ほど遡ると、

その川岸にも一つ家がある。これは富山村の字大尾おおおに属していて、大尾の本村は、そこから急坂を半里も登った山の中腹に展けた村である。もっとも本村と言っても家数はたった五軒である。この一つ家なども何か意味がありそうである。

天竜川の西岸の、三河地内では、もっとも上の富山村河内から、遠江の川合まで五里余りの間に、河に沿った屋敷を数えると、この大尾の飛地が一軒、それから滝原、湯の島と家があって、湯の島の下流に松島とあって、現在二軒の村がある。それでここ十数年前に還元して考えると、五里余の間に、飛々に五軒屋敷があった勘定になる。そうして後には各種の経済上の理由もあったのだろうが、いずれも険しい山を隔てて奥の村と因縁を持っていたのも不思議である。

ついでに反対の側の遠江地内を見ると、三河の富山村の向かい側から数えてゆくと、一里ほど下がったところに、川の岸に白神しらなみという大きな構えの家が一軒ある。これは物資供給の上から、奥の水窪の関門のような関係もあった屋敷である。それから約半里ほど下がったところ、すなわち三河の大尾の一つ家の対岸に花祭りの行われていた山室やんぼろ一軒の部落がある。その他には、やはり川上の川合までは家は一軒もないのである。

雪祭りの雪

「はまみず」「はまずな」「こだま石」のことから、今一つ考えられるのは、新野の雪祭りにおける雪である。新野の雪祭りは、雪の降ることが祭りの一つの瑞祥としてあって、雪のない年はわざわざ遠山（信濃下伊那郡遠山）に採りに行って背負って来るが、これはかならずしも雪のない年に限ることはない。雪を採って来ることは花祭りにおける「はまみず」の如き関係もあって、そのための役が別に定められていたのである。